



令和7年12月18日（木）に、第3回「地域を紡ぐ看看連携セミナー」を開催いたしました。会場参加とオンライン参加を併用したハイブリッド形式で実施し、大学病院から14名、地域から4名、計18名の方にご参加いただきました。

今年度は、「食べる喜び、みんなであつなく ～病院×地域の摂食嚥下サポート実践～」をテーマに、全3回シリーズの実践的な企画として実施しました。第1回・第2回では、旭川医科大学医学部看護学科看護学講座在宅看護学領域 教授 山根由起子先生を講師にお迎えし、「知識編」「実践編」として、摂食嚥下に関する基礎知識から具体的な支援方法まで、講義および演習を通して有意義な学びを提供していただきました。第3回では、これまでに学んだ知識と実践を踏まえ、嚥下機能障害のある方が「食べる喜び」を得るためにはどのような支援が可能かについて、事例を用いながら参加者同士で意見交換を行い、知恵を出し合いました。

以下、当日の内容をご紹介します。



Aさんは青年期より精神疾患を患っており、数年前から誤嚥性肺炎を繰り返すようになったことから、経鼻経管栄養を導入し、現在施設で暮らしています。しかしAさんは、「できることなら必要な栄養を口から摂取し、ミトンから解放されたい」という思いを抱いています。そこで看護の方向性として、精神症状の安定を図りながら、カテーテルの自己抜去を防ぐための安全への配慮を行うとともに、ゼリーやプリンなどを用いた経口摂取量の段階的な増量、リハビリテーションの導入、薬剤調整などの介入が行われています。これらを踏まえ、さらに有効と考えられる経口摂取の介入方法について、参加者から意見をいただきたいと問題提起がなされました。



Aさんが、嚥下評価と経口摂取の促進を目的として入院していたときの補足説明がありました。当時は、精神運動興奮が強く、結果として薬剤調整が主な関わりとなりました。精神疾患の慢性期においては、思考障害が対人関係や社会性に影響する過程で、人格水準をいかに保持するかが重要です。現在の内服薬は、CPZ 換算値（副作用リスクの評価）では高用量に該当しますが、ADLの向上や生活の安定が得られていることから、調整の余地はあるものの、現時点では適正量と考えられます。また、嚥下機能に影響を及ぼしやすい錐体外路症状の副作用が比較的少ない薬剤が選択されている点についても補足がありました。



これらの内容を踏まえ、グループワークを行い全体で共有しました。

グループワークでは、嚥下機能の再評価や、食事形態をミキサー食とすること、本人の嗜好に合わせた工夫について意見が出されました。ミトンに関しては、自己抜去に至る要因を検討するとともに、対応策として胃管カテーテルを違和感の少ない細いものへ変更する案が挙げられました。短い時間ではありましたが、活発な意見交換が行われました。



全体共有の後、講評をいただきました。

嚥下の再評価は有意義であること、今後食事回数を増やす場合には朝の覚醒状況が重要であり、覚醒不良は嚥下反射を起こしにくくするため、十分な覚醒を促すことが大切であるとの助言がありました。また、カテーテルを細くすることは違和感の軽減につながり有効であること、PTEGと呼ばれる経鼻ではない栄養管理方法についての紹介もありました。さらに、本人の食べる意欲や継続性を踏まえ、焼肉ゼリーなどの好みの味を取り入れる工夫や、少量で高カロリーの経口栄養補助食品を試すことの有用性が示されました。薬剤についても、嚥下に影響を及ぼす副作用の観点から再評価を検討する余地があるのではないかと意見がありました。



続いて、Aさんが入院していた時の宮地師長より、入院中の関わりを振り返り、「生活者として、いかに食べることを支えるかという本人の思いを尊重する視点と、それを在宅へ引き継ぐ視点の重要性に改めて気づかされた」とのコメントがありました。

最後に、本事例を提供して下さった訪問看護師原谷氏より、セミナーを通して得られた多様な視点や専門的意見を持ち帰り、スタッフ間で共有し、今後の看護実践の向上につなげていきたいとのまとめが示されました。



今年度初の事例検討会となりましたが、直後アンケートでは「満足」「おおむね満足」「新たな学びを得ることができた」は100%という結果でした。参加動機からは、摂食嚥下の看護や経腸栄養に伴う抑制の課題に対する関心の高さがうかがえました。看護実践への学びとしては、具体的な評価方法や物品の活用、事例を通じたアセスメントが現場で実践できるとの意見があり、最善のケアを探究し続けることの重要性を再認識したという声も聞かれました。

話し合いを通して立場の異なる視点が共有され、看護実践の変容につながるきっかけが得られたと考えられます。一方で、訪問看護ステーションからの参加が増えることを期待する意見もあり、今後は継続に加え、参加者の広がりにも努めていきたいと考えています。

なお、本セミナーは皆さまからいただいたアンケート結果をもとに企画しております。今後、企画の参考とするため、3か月後アンケートへのご協力をお願いいたします。

厳しい寒さが続きますが、やがて訪れる春とともに、次回の新たな学びの場で皆さまと再びお目にかかれることを楽しみにしております。

